

13. 6. 20

毎 日

ドクター中川の がんの時代を 暮らす



がんは男性に多い病気です。一方、若い世代では女性の方が多く、30代の患者は女性が男性の3倍に上ります。これは子宮頸がんが30代に最も多いためです。

子宮頸がんは性交渉による「ヒトパピローマウイルス」の感染が原因のほぼ100%です。性交渉開始年齢の若年化に伴い、若い世代の患者が急増しています。20〜30代の患者は、過去20年で倍増しました。国内では年間約9000人が発症し、約2700人が亡くなっていますが、出産・子育て世代の女性を襲う病気であることから、欧米では「マザーキラー」の異名を持ちます。

女性の約8割がヒトパピローマウイルスに感染経験を持つとされますが、がんを発症するのは感染者のわずか0.1%です。ただし、ウイルス感染がなければ子宮頸がんの発症はまずありませんから、ワクチンを打つことが有効です。欧州の接種率は8〜9割に達します。ワクチンはすべての型のウイルスの感染を予防

ワクチン接種 冷静な判断を

M20

76

することはできませんが、接種によって子宮頸がん全体の発症リスクを3割程度まで下げます。さらにがん検診も受ければ、子宮頸がんで命を落とすことはほぼなくなりそうです。このため、がん検診も当たり前となっている欧米では、子宮頸がんは「過去のがん」になっているのです。

日本でも今年4月から、「子宮頸がん予防ワクチン」を小学6年〜高校1年の女子生徒に無料で定期接種することになりました。しかし、予防接種の安全性を議論する厚生労働省の検討会は今日14日、一部の保護者らの声を受け、ワクチン接種について「積極的な勧奨を一時やめる」という判断をしました。これまで接種を呼びかけてきた自治体や学校などでは大きな混乱が起き、保護者や生徒にも動揺が広がっています。

日本でワクチンを接種した約328万人のうち43人に慢性的な重い痛みが生じています。ワクチンとの因果関係は不明ですが、予防接種法に基づき補償を受けることができます。一方、328万人へのワクチン接種によって、毎年約300人の発がんを予防できています。まさに有効性とリスクとのバランスを、冷静に比較する必要があると思います。
(中川恵一・東京大付属病院准教授、緩和ケア診療部長)

この欄のコラムは鈴木隆雄さん（国立長寿医療研究センター研究所長）、三浦於菟さん（東邦大客員教授）、岡本左和子さん（NPO法人架け橋理事）、中川恵一さんが交代で執筆します